

# 史遊会通信

No. 210  
平成24年6月9日行

事務局  
(03)  
3712-0651  
下山田方

例会のお知らせ  
◎ 6月例会

日時 平成24年6月27日(水)  
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階  
社会教育館 第2研修室

講演 平山善之氏  
テーマ 多賀城碑「蝦夷国界」は  
どこか

森下征二

自由執筆 隆恵・柴田弘武・  
瀧澤中の諸氏

締切 6月末日  
◎ 7月例会

日時 平成24年7月25日(水)  
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階  
社会教育館 第2研修室

講演 和田肇允氏

テーマ 地震と建築

自由執筆 鍋屋次郎・中山喬央・  
中込勝則の諸氏

締切 8月20日

周の幽王の二年(B.C.七七八)のことである。都の鎬京を流れる涇水、渭水、洛水の三つの川が大いに震動し、大洪水を引き起こした。続いて岐山が崩れた。太史の伯陽が不吉に言い放つ。周は將に亡びようとしている：

褒姒は何故笑わなかつたか？

昔、褒の二神が龍に化して夏の国の朝廷に現れ糞を放つた。夏王はその糞を集めて檻の中に收め、密かに秘藏した。その後、周の厲王の時代になつて、これを開くと、いきなり檻の中から糞が溢れ出し、部屋中が一杯になつた。

翌年、幽王が褒姒を嬖愛した。やがて彼女に伯服が生まれると、幽王は申后と太子の宜臼を廃し、褒姒を后とし、伯服を太子とすることにした。太史伯陽が言う。禍はできてしまつた。もう、どうすることも出来ない。もししかしたら、彼がそう言つたのも当然かもしれない。褒姒には次のような出生の秘密があ

ある。

不思議な」とに、皇后となつた褒姒は殆んど笑わなかつた。どうやら笑うことと好まないようである。幽王が何とかして笑わそうとしたが効果はなかつた。ある時、手違いで狼煙を上げてしまつたことがある。狼煙は外敵が都へ進入したことを表す。諸侯の兵が慌てふためいて駆けつけた。しかし何事もない。彼らは茫然として立ち尽くした。

それを見て……、褒姒が笑つた。彼女が声を立てて笑つたのである。幽王は初めて妻の美しい笑顔を見た。味を占めた彼はしばしば狼煙を上げるようになつたが、次第に誰も信じなくなる。

折もあり、嘗ての皇后の父である申侯が謀反を起こした。繪・西夷・犬戎を語らい、協力して幽王を攻めて來たのである。驚いた幽王が狼煙を上げて諸侯の救援を求めたが、誰も助けに来なかつた。申侯は遂に幽王を驪山の下に殺し、褒姒を虜にし、周の宝を盡く奪つて引き上げると、孫の宣臼を立てて周王とした。

しかし、これを契機に戎寇が起つてようになつた。耐え切れなくなつた周は都を鎬京から東の洛陽に移すが、国勢は著しく衰つてしまつた。案に相違し、そのアンバランス

退し、やがて政治の実権をも失つたのである。

以上が、司馬遷が「史記」で著した亡国の美女、褒姒の伝説のあらましである。一読してわかるように、この伝説の特徴は、褒姒が龍の娘であることと、笑わぬ美女だと言うことに尽きるようだ。

それにしても、何故褒姒は笑わなかつたのだろうか？ 甲論乙駁の中から、次の二説を紹介しよう。

先ず、医師の小長谷正明氏は言う。人間の表情は、顔の皮膚の裏側についている顔面筋の収縮や動きによって作られるが、褒姒はこの筋肉を動かす顔面神経が麻痺していたのではないか？ それも笑うときだけ現れる片側麻痺だと言われる。

片側麻痺では、目や口を閉じる力は正常に働くが、情動性の麻痺が顔の半分にだけ起こり、感情に伴う目元や口元の動きができるない。だから、たとえ心で笑つても、顔の半分は笑えないことになる。多分褒姒は、そのアンバランスが露呈するのを怖れて、普段は全く笑わないように心がけていただろう。しかし烽火が上がつた出来事で、堪え切れずに笑つてしまつた。案に相違し、そのアンバランス

スな笑顔が、幽王の心を捉えたのではないかな……。

面白い考え方だが、伝説の美女を、科学的に捉えることに抵抗を感じられる向きもあるだろう。

それでは次に、作家の井上靖氏の考え方を伺うことにしてみよう。彼はその著「褒姒の笑い」の中で次のように主張される。……。この話に依ると、褒姒はイモリの子にされているが、泡の子であると言つてもいいわけである。いずれにしても、国に対して不詳に作用する何ものかを持っているものと言うほかなく、そうした子を育てるように運命づけられた夫婦者の手によって育てられたのである。

こう考えると、この説話は褒姒が幽王の寵妃でも愛妃でもなく、謂うならば幽王の運命そのものであるとするということを物語つてゐるようと思われる。運命であるとすると、褒姒が笑わなかつたことは異とするに当たらぬようである。それが内部深くに匿し持つてゐる生命のようなものが動き出した時だけ、運命は妖しい会心の笑みを浮かべたのである……。

なるほど、説得力のある考え方である。し

かし、褒姒を「幽王の運命」という狭い範囲に限るべきだろうか？私は、褒姒を龍の娘として、広く「天意」の伝達者とみたい。天意とは何か？著作物の中の天意とは、著者の意思である。褒姒は「史記」の著者である司馬遷の意志で、笑わない女に仕立てられたのではないか。以下、私の考えを述べてみたい。

司馬遷の父司馬談は、武帝の封禅の儀に参加できなかつたために、憤りを発して憤死した。封禅とは何か？封禅とは、新しい王朝が天命を受けたことを、天地に感謝する祀りである。古来、黄帝のほか始皇帝など、限られた権力者しか実施できなかつた代物である。武帝はそれを泰山で祀ろうとしたのだ。

時に、司馬談は漢室の祭祀を司り、歴史を記録する太史令だった。その彼が、当然参加すべき封禅の儀から外されたのである。方術にうつつを抜かす武帝が、太史令より方士を信頼したからだ。司馬談は武帝の措置に憤つた。そして、文字通り憤死したのである。他方、司馬遷にも武帝に向けられた憤りがあった。彼は「李陵の禍」に巻き込まれ、こともあらうに去勢されてしまったのである。

経緯はこうだ。武將軍李廣利配下の名将

李陵が、悪戦苦闘の結果、匈奴に降り罪に問われた時、武帝の下問を受けた司馬遷が、敢然として彼の弁護に当たつたのだ。しかし、

それが却つて將軍李廣利を貶めようとした行為と解釈され、武帝の怒りを買つてしまふ。

有無を言わざず投獄され、死刑の判決をうけた彼は、罪を購おうにも金がない。しかし、「史記」の完成を見ないまま、死ぬ訳には行かなかつた。進退窮まつた彼は、金の代わりに官刑を受けることで、死刑を免れたのである。当時の士大夫には、官刑より大きな恥はなかつた。彼は獄中で苦悶する。僕の如きは大質已に虧欠す。才は随和を抱き、行いは由衷の如しと雖も、終に以つて榮となすべからず。ただ以つて笑われて、自ら點すに足るのみ……。

無理はない。官刑は全人格の否定なのだ。

彼は激しい怒りに駆られて呴く、是れ余の罪なるかな……と。おそらく、彼の目にはこの時、武帝は絶対的な帝王ではなく、単なる人間としてしか見えなかつたのではないか？

そうだとすれば、武帝の施政者としての欠点が次第にはつきり見えてくる。方術にうつを抜かす武帝は、漢朝を黄帝の世（土徳の採用。黄色尊重）に擬するだけでなく、自分

を黄帝に擬して龍だと思いたいようだ。漢朝の祖・劉邦は龍の子である。ならば、自分も龍の子ではないか……と。

よからう。司馬遷は「史記」を書きながら唇を噛む。彼は本紀に龍の説話を四つ書いた。一つは、劉邦龍生説話。二つは武帝本紀に黄帝説話（龍に跨り昇天）を差し込んだ。

しかし、龍とは何か？それを明確にするため、三つ目に、夏の暴君・孔甲に天が下した龍を登場させる。しかし、彼は結局龍を養うこと出来ない。龍は夏が亡びる前兆だったのである。

そして四つ目、極め付きが褒姒説話だ。劉邦と同じ龍の子である褒姒は、周を滅ぼす役割を果たす。ならば、龍は夏を滅ぼし、周を滅ぼした不吉極まる生き物であろう。司馬遷はそれを「史記」に書こうとしたのではない。褒姒は特に、司馬遷の武帝へ仕掛けた刺客であつた。

そうだとすれば、司馬遷父子の「恨」とも言える褒姒が笑うはずがなからう。しかし、幽王が殺された時、彼女は周の滅亡を眼前に不吉な嘲笑をしたはずだ。その嘲笑は、司馬遷の漢の滅亡を予言する嘲笑でもあつたのではないか？

自由執筆  
おひなさま

小田 紘一郎

三月三日は桃の節句、雛祭りである。日本においていつから行われているであろうか。少なくとも源氏物語には出てこない。江戸時代からか、調べてみたいと思つていてる。

私達の家では、昨年長男のところと娘のところにそれぞれ女の子が生れたので、今年は初節句ということになる。女の子の健やかな成長と幸せを祈る」の日本での美しい行事は、また季節の移りかわりをも我々に認識させてくれる。

ところで、娘のところには、実家からおひなさんを贈る習慣となつていてる。

私は、昨日、おひなさんの生産日本一の埼玉県岩槻の里を訪れ、さがし求めた。妻は前々からデパートに目をつけたのがあつてそれを購入したいと言つていた。なかなか物によつては高価なものがある。どちらで買うかと話し合つていてるうちに、ふと妻は我家にも娘が子供の頃使つたおひなさんがあると言い出した。私の記憶からは、

すっかり消えうせていたが、屋根裏部屋をさがしてみた。

埃にまみれた箱の中にそのおひなさんを見つけて、多少汚れた額などをふいてやると、凜として立派な美しいものであつた。

このおひなさんは、思い出してみれば、今は亡き妻の父が孫（私達の娘）の為に買つて贈つてくれたなかなか高価なものであつた。しばらく田舎の実家に飾つていた七段のこのおひなさんは、私達が当地に住宅を求めて住んだ時に、私のこれも亡き母がその中の一段の男と女のひなだけを持つていくように言つて持たせてくれたものである。

娘が十歳になる頃まで、春になると毎年我が家を明るくにぎわしたものであつた。

娘もいつしか成長し、ひなを飾らなくなり屋根裏部屋においてあつた。

思えば二十年振りにこのおひなさまは、目をさましたわけである。妻は新しく買うのはやめて、これにしようと言う。私も大賛成である。経費が節減できるというだけでなく、我が家に引き継がれている実際に貴重なものだからである。娘は今は三十八歳で二児の母親となり、近くに住んでいるが、毎日のように孫達をつれて遊びにくる。

かくて娘の代のおひな様は、娘の娘（私達の孫）に引き継がれこととなつた。妻が「きおら」と名付けたこの孫娘が成長し、やがて結婚してまた娘が出来たら、このかぎり伝えて貰いたい。それは三十年も先のことであるが、その時には私達はそれを見ることはないであろう。

こんな事の中に私の頭には、次の三つの物語と音楽の話がふと浮んできた。

まず第一は、井上靖の小説『楼蘭』に出てくるシルクロードの地より発見されたミイラの女性の話である。文庫本を開いてみると、「うら若い女性は突然の死に見舞われ、愛する人々の手で経帷子を着せられ、平和な丘の上に運ばれて、遙か後代の者達が呼び醒すまで、二千年近くの永い眠りに憩うていたのである。」と美しい文章で書かれている。

二つ目は、最近とくに熱中しているワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」に出てくる女主人公「ブルュンヒルデ」の話である。神である父（ヴォートン）に反抗して永遠の眠りにさせられたワルキューレの一人である永遠の女性「ブルュンヒルデ」がジークフリートの愛の力によつて目覚めさせられるところ

自由執筆

靖國詣で

千坂 精一

今年もまた靖國神社に参詣する日がきた。あれからもう六十七年経つが、深く重いおもいはいまもかわらない。

私は、昭和二十年一月練習生教程を卒えて南九州の海軍航空隊に配属になった。

その航空隊は三カ月まえのフィリピン戦のとき、マニラのマバラカット基地から特攻出撃して二十二機の艦爆機と四十四人の搭乗員を喪い、潰滅状態で南九州の基地にもどり、再建育成の特別訓練中なのであつたが、そんなことはまったく知られていなかつた。

私たちの航空隊は、二月十日に新編制された五航艦（第五航空艦隊）の翼下に入った。司令長官に親補された宇垣纏中将は、着任にあたり軍令部の参謀から、「五航艦の任務は、麾下各航空隊の全機をもつて特別攻撃を展開すること」であると内示された。宇垣長官も、（伎倆未熟な残存搭乗員をもつて成果を期待し得るのは、体当たり攻撃よりほかにない）

そう考えていたので諒解した。

三月に〈菊水部隊〉と改称した五航艦に対して、大本営は、  
「極力攻撃力を温存して決戦に備え、敵来攻時には特別攻撃に徹し、昼間集団攻撃を避け薄暮黎明の奇襲攻撃を主体とする戦法」を命じた。

これにより五航艦菊水部隊は、〈特攻航空艦隊〉と化していく。

以後、翼下の各航空隊の戦闘指揮所には、楠木正成で知られる菊の花が流れに浮かぶ〈菊水の大幟〉が立てられた。

三月十一日、五航艦司令部は西カロリン諸島ウルシー環礁に敵機動部隊空母群が補給のため集結しているとの急報を受けて、奇襲攻撃をかけるべく梓特別攻撃隊銀河艦爆機二十四機を鹿屋基地から出撃させた。

それが指揮官たる飛行長の信念だつた。

だが、特攻の戦果に後れる日がつづく二十四日の出撃で援護戦闘機随伴遅れの間隔を狙われ、待ち構えていたグラマン数十機の襲撃を受け飛行長機は風防とタンクを撃ち抜かれ、火を噴き真っ逆様に墜落するのを懸命に立て直し、風圧で炎は消えたものの漏れたガソリンが風防の破れ目から吹きつける状

態で辛うじて帰投し、顔中煤に塗れ自慢の髭も焦げつく形相でだき抱えられて脱出した飛行長が入院加療中に、二航艦は慄々しい戦果

ていて十一機が突入電を打つてきたものの、三機は夜暗になり目標の視認困難のため突入を中止してヤップ島に不時着したという。それでも空母二隻以上を大破炎上させたといふのだが、確認できたのだろうか。

この梓特攻隊の出撃によつて、五航艦翼下の各航空隊には緊張感が漲つた。

が得られぬまま一航艦と統合されついに特攻戦法のやむなきに至つてしまつたのである。南九州基地へ引き揚げてきて新制の五航艦に編入されたとき、宇垣長官の〈特攻宣言〉に反撥した飛行長はフィリピンでの辛い経験に思いを馳せて、あらためて全隊員に、「彗星隊はあくまでも昼間強襲である。どんなことがあつても爆弾を当てるといい。爆弾は一日で補充できるが搭乗員は育成に何年もかかる。充分自重して無理な飛行はするな。再挙をはかれ」

そう大声で訓示した。

そして六〇〇メートルまで降下して爆弾投下していたのを、四〇〇メートルにする猛訓練を課した。飛行長にしてみれば、「爆撃でとにかくやつけて帰つてこい。体当たりなどはどうしてもだめなときだけだ」

そう公言した手前何としても成果を挙げて帰投させねばならぬ思いからであつたろう。

そして、ついにそのときがきた。

昭和二十年三月十七日、彩雲偵察機から、「二二〇〇鹿屋の南東一六五浬（約三〇六キロ）に敵機動部隊四群発見」

の報に私たちの航空隊が出撃を命じられた。

十八日。一次、二次、三次と出撃したが、十八機と直掩戦闘機三機が帰らなかつた。米側は空母エンタープライズ、ヨークタウン、イントレビット三隻損傷と発表した。

十九日。四次、五次、六次、七次と出撃したが十四機未帰還、うち三機「突入」打電。米側は空母フランクリン、ワスプが損傷。

二十日。残存機で八次攻撃隊を編制して出撃したが、七機と直掩戦闘機一機が帰らず、うち四機が「突入」を打電してきた。

米側は空母エセックス大爆発、空母サラトガ大火災と発表した。

こうして私たちの航空隊は潰滅した。

私は出撃前夜に征く者と残る者が一緒になつて円陣をつくり、肩を組み合つて、「貴様と俺とは同期の桜離れ離れに散ろうとも花の都の靖國神社春の梢に咲いて会おう

の九段坂を一步一步踏み締めて上つてゆく。大鳥居から境内へ入ると左側の桜並木の下を歩いて行き、大手水舎で手を清めてから第二鳥居と神門を潜つて拝殿の前に額衝く。帰りは、能楽堂前の桜木の庭を通り抜けて遊就館の前まで行き、左に曲がつて神池庭園を一周して遊就館までもどり、一階玄関ホール隅の小さな茶房（結）で硝子の仕切り越しに展示してある零戦眺めながら海軍カレーと白玉ぜんざいで昼食をとる。

そのあと、また能楽堂の前を通つて神門を出ると、こんどは往路と反対側の桜並木の下を歩いて大鳥居を出る。

「靖國神社の春の梢に咲いて会おう」と誓つたのであるから、まだ桜は開花していないが逝つてしまつた先輩たちはきっと待ち切れずにきつてゐるに違ひないと思われ、此の世から先輩たちは見えないが彼の世からは私が見えるような気がして、桜の蕾を見上げながら一本一本拾い歩いてみるのだ。

老齢になつた私がまさかあのときの紅顔の美少年だと気づいてくれるはずはなくとも、桜の梢の下を歩けば先輩たちの息遣いを感じられるような気がして、毎年おなじ順路を歩きつづけている。

ろである。

「指環」は、全部で四部作十五時間程かかる壮大なオペラであるが、これは第三部（ジークフリート）に出てくる話であり、ハープに乗つて奏でられる美しいメロディは感動的である。

三つ目は、芭蕉の奥の細道の話である。

最初の発句に「草の戸も住み替る代ぞひな  
の家」

というのである。

陸奥に旅立つに際し、深川の自宅（いわゆ

る芭蕉庵）を売却した。買つてくれた人は、自分とは異なり妻子のある人であり、従つておひなさんがにぎやかに飾られるであろうと、いう意味である。孤独と華やかさとが見事に対照的に描かれており、又、旅立つ意気込みが強く感じられ、平泉での「夏草や…」の句と共に奥の細道の名文ともども私の好きな句である。

三月三日には、二十年振りに我家で見つけられたおひなさまが娘たちのマンションに飾

られ、親戚が集まつて祝宴が開かれる事となる。

同じく「指輪」の第二部ワルキユーレにおいて、ジークムントは、ジークリンデとの愛の二重奏で歌う。

「冬の嵐は去り、快い月となつた。柔らかな光に包まれ、春は輝いている……」

ちなみに指環では、最後の部（神々のたそがれ）で神の支配する時代が終り、人間の時代になつた事で、華々しく幕を閉じている。

春はもうすぐである。（24・1・16）

自由執筆

紅葉する山河声なし

敗れたる

（吾亦紅）

山本 鎮雄

新明博士はナチスが台頭したワイマール・ドイツ崩壊期の一九二九年から二年間、ドイツのベルリンを中心に留学され、ドイツ社会学の研究のほか、「歐州通信」と題して月刊雑誌『経済往来』に十二編を寄稿し、大学ノ

ートに留学日記を克明に記録した。その一部を収録して『ワイマール・ドイツの回想』と

して刊行された。

て持参し、東西冷戦を象徴する分断都市ベルリンを訪ね、「ベルリンの壁」のブランデンブルグ門の南沿いのポツダム広場を見物した。往時、欧州最大の繁華街がこのポツダム広場だった。

第二次戦争末期、ベルリン大空襲で全市街は焦土となつた。その後、広大なポツダム広場は東ドイツの領土として「ベルリンの壁」に囲まれた。西ベルリン側に見物用の粗末な木製のお立ち台があつた。私はそれに登り、コンクリート製の壁の上から「ベルリンの

一九八四年、私の恩師の新明正道博士（東北大学名誉教授、日本学士院会員）が亡くなられた。その翌年、遺著『ワイマール・ドイツの回想』がご遺族の家永登氏の編集によつて出版された。

壁」の内側を見た。

雑草が一面に生い茂り、東ベルリン側には小銃を携帯した監視兵が歩哨し、警備車が往来し、監視小屋が設置されていた。監視兵には、東ベルリンから西ベルリンへ厳重な壁を越える逃亡者に銃殺命令が下されていた。

その時、脳裏に浮かんだのが、芭蕉が平泉で作った「夏草や兵どもが夢の跡」だった。つぎに杜甫の「春望」の「国破れて山河あり、城春にして草木深し」という一節を思い出した。

新明博士は日本を代表する理論社会学者・学説史家、さらに評論家・時評家で、しかも俳句を作り、俳画を描く文人だった。俳号を「吾亦紅」と称し、敗戦直後に表題の俳句を詠んだ。

新明博士は仙台市街を流れる広瀬川の左岸から対岸にある青葉山を眺望したのである。対岸には陸軍第一師団の川内駐屯地があつて、戦時中は兵士の銃声や歎声、早朝から「おいつちに、おいつちに」の勇ましい掛け声を聞かれたであろう。

「杜の都」と言われた仙台市街も川内駐屯地も敗戦直前の仙台大空襲で全焼した。敗戦直後の晚秋、静まり返った青葉山や広瀬川の対

岸に鮮やかな紅葉が再現し、しみじみと総力戦に「敗れた」ことを実感したのであろう。

新明博士はこの俳句を色紙に書き、戦地や兵舎から復員した学生、勤労動員から復学した学生たちに贈った。学生が日本の敗戦という社会的現実を直視し、戦後の復興と民主主義国家の建設に貢献されることを期待したのであろう。

新明博士が東京帝大の前期新人会時代から私淑した社会派ジャーナリストの長谷川如是閑はしばしば「國破れて生活あり」の一句を愛用したと記す（田中浩著『長谷川如是閑序説』二九頁）。

明治維新以降、国家は富国強兵の戦争国家 warfare state だった。およそ個人の生存権や自由、生命や安寧や幸福を保障する福祉国家 welfare state ではなかつた。如是閑はそうした国家体制に一貫して異議を申し立て、庶民の生活事実に注視した。私の好みで言えば、人間が起した戦乱や戦争にたいして、自然の悠久を象徴する「夏草」「山河」「紅葉」に感慨をおぼえるよりも、そこで野良仕事に励む庶民の「生活」こそ刮目に価すると言える。

事務局だより

※前号でもお知らせしましたが、七月の講演は、鯨氏の紹介です。

和田肇允氏をお迎えします。氏は一級建築士・構造計算適合性判定員で、現在は建築構造センター神奈川事務所長でいらっしゃいます。昨年の大地震以来建物の構造・耐震性などが問題視されるようになつてきましたので、参考になるお話を伺えるのではないかでしょうか。

※今年は数人の方が退会なさいましたので、発表されております自由執筆や講演者の担当月が若干変わつきました。友の会員の論文もその間に割り振つたりしますので、順番に多少の変更が生じています。編集には気を使つてはおりますが、その点はご了承くださいますようお願いいたします。

※今のところ昨年のような節電による研修室の使用制限は区の社会教育課からは来ておりませんので、なんとか会場は確保できております。しかし区からの通達は突如として伝言されますので安心はできません。その節はご協力を願い申しあげます。